

栄村研修に参加して

— 学生感想文 —

東京農業大学国際農業開発学科農業開発政策研究室

2008年7月31日～8月1日

執筆者一覧

修士 2 年 飯森 文平 (p2)

修士 1 年 顔翊嵐 (p6)

4 年 宮坂大智 (p8)、弓田淳也 (p10)、黛 青葉 (p13)、野口拓郎 (p16)
松崎耕祐 (p18)、松田夕希 (p23)、大畑朝義 (p24)

2 年 青塚香子 (p25)、高橋麻友美 (p26)、山北淳一 (p28)、桜井智紀 (p29)

1 年 鵜澤佳史 (p31)、元満佑美 (p32)

1：はじめに

現在、私は「農村開発と障害」というテーマで勉強をしている。

1970年代末から、多くの途上国において「開発と障害」の政策として **Community-Based Rehabilitation**（地域に根ざしたリハビリテーション：以下 **CBR**）が行われてきた。**CBR**は、都市部の施設において行われる医学リハビリテーションを中心とした従来の障害者政策に対し、そのような形態ではサービスが行き渡らなかった農村でこそ有効な政策であるといわれている。そして、何より **CBR** が従来の政策と異なる点は、その理念でも触れられているのだが、「障害者」が地域変革の担い手と捉えられている点である。つまり、**CBR** が農村地域において有効な政策であるという点を考えれば、**CBR** は「障害者」をも担い手とした農村開発の手法であると言えるであろう。しかし、**CBR** の研究書や報告書からは、従来の政策と同様にセンターなどの施設で行われる医学リハビリテーションが中心であり、農村開発には至っていない印象を受ける。

それでは、なぜ **CBR** は農村開発に至らないのであろうか。その原因の一つに **CBR** は「地域に根ざしたリハビリテーション」であるのに、依然 **R**（リハビリテーション）という側面にのみ焦点が当てられ続けていることが挙げられるのではないだろうか。もちろん、障害という問題を考える時、**R** の側面に焦点を当てることは重要なことではあるが、農村開発という問題を考えた場合、「**Community-Based**=地域（農村）にねざした」という側面を考慮することが不可欠である。しかし、現在の「開発と障害」という分野にはその視点が大きく欠けているのではないかと感じている。

今回の栄村研修旅行は1泊2日と非常に短いものであり、栄村について多くを理解したとは到底言えないであろうが、私自身、「地域（農村）に根ざす」とは何かということを考える良いきっかけとなったと感じている。

2：研修内容の概要

今回の研修では、栄村役場の方々、京都精華大学の松尾先生に村内を案内していただきながら村独自の自治事業である「道直し」や「田直し」の見学、また「げたばきヘルパー」についてのお話を伺うことができた。さらに、1日目の夜には、前村長である高橋彦芳氏にお話を伺う機会を設けていただいた。

3：栄村村内を巡る

村役場で挨拶を終えた後、2日間に渡り、村内を案内していただいた。

(1) 「森宮野原駅」

まず、最初に訪れたのは、「森宮野原駅」である。ここで圧倒されたのは何とんでも、日本最高積雪地点を示した柱であった。7.85mの積雪である。事前の勉強会において、栄村が豪雪地帯であることの認識を持っていたが実際にその高さを前にすると、驚きを感じずにはいられなかった。現在では、ここまでの積雪量はないそうだがそれでも豪雪地帯には変わりはない。この、最高積雪量が示された柱を見ただけでも、栄村に暮らす人々にとって冬季の雪対策が非常に重要なことが容易に想像できる。

(2) 野々海池へ

駅を見学後、マイクロバスから、軽トラの荷台に乗り換え野々海池へと向かった。

野々海池は、水の確保が難しく米の自給を行うことが困難であった旧水内村での開田を可能にするための貯水池としてつくられたそうである。野々海池づくりは、1949年に開始され7年かけて池が完成した。その後、水路整備、開田などを含めると1964年に全ての作業が終了し、90haの水田が完成したそうである。

野々海池は、想像していたものよりはかなり大きな池であった。標高約1,000m付近の場所にこのような池をつくったことに感心せずにはいられない。ましてや、当時は私たちが軽トラで登ってきたような道を、石や砂などを手に持って登ってきたそうであり、作業の大変さは相当なものであったことであろう。現在、野々海池を利用しているのは白鳥地区、平滝地区、横倉、青倉、森、西大滝（飯山市）の6地区である。

そして、この野々海池に加え、もう一つ気になることが水路に関してのことである。当たり前なことであるが、いくら水を貯水できる池があってもそれを流す水路がなければ米を栽培することはできない。私たちは、野々海池に登っていく途中で、水路を見学した。率直な感想として感じているのは、水路をつくり、管理することは、池づくりよりもさらに大変な作業ではないだろうかということである。見学した水路が、林の中を流れていたように、水路は軽トラが走る道の脇を流れているわけではない。ここからも想像できるように、水路は村人が山や林に分け入ってつくられたのだろう。見学した水路はごく一部でしかないが、6地区に水が流れるように山の中に水路を張り巡らせる作業は非常に大変な作業であったであろう。

(3) 道直し

初日に極野集落、2日目に平滝集落における道直しを見学した。

道直しは、冬季に除雪車が通るためには非常な重要な作業である。除雪車が通るためには道幅が 3.5m（理想は 4 m）必要になるからである。

道直しを行うためには、道路改良組織委員会が組織され、まず地区での話し合いが行われ、次に集落での話し合いが行われる。そして次の段階で役場に話を持っていき、初めて図面が引かれる。道直しのために、自分の田をつぶして道にする人も出てくるため各段階での話し合いは非常に重要なものであろう。しかし、多くの場合集落のためという考え方によって納得するのだそうだ。

（4）げたばきヘルパー

2 日目に高齢者福祉センターで、「げたばきヘルパー」に関するお話を伺った。

げたばきヘルパーに関する活動状況などは、いただいた資料等に載っているのでここでは詳しくは触れない。ここでは、説明を聞いた中でいくつか心に残ったことを述べていきたい。

1 つ目は、訪問のサービスが伸びていない理由の 1 つは、栄村の高齢者はまだまだ元気であるということである。一般に高齢者というと 65 歳以上という基準が思いつく場合が多いと思うが、栄村では、65 歳などまだまだこれからという年齢だそうである。このことは、その村にはその村の「高齢者」に対する考え方があるということを表しているといえるのではないだろうか。

そして 2 つ目が、実際にヘルパーとして活動していらっしゃる桑原さんの「げたばきヘルパーは仕事だとは思っていない」という言葉である。この言葉の背景には、げたばきヘルパーを利用する人たちから、ヘルパーである桑原さん自身が料理の作り方を聞いたり、昔話を聞いたりしているという状況があるのである。このことから分かるように、げたばきヘルパーのサービスを利用している人たちは単に介護の受け手としてのみ存在しているのではなく、げたばきヘルパーのサービスを介して若い世代の人たちに村の歴史や、暮らしの知恵を伝えているという役割を担っていると言えるのではないだろうか。そして、それは、げたばきヘルパーがその地域に生活する人間であるからこそ、その人にとっても村にとっても意味のあるものになっていくのではないだろうか。

このように、げたばきヘルパーという制度には、「地域（農村）に根ざした」政策とは何かを考える際の、大きなヒントがあるのではないかと感じた。

4：実践的住民自治（高橋彦芳前村長の話より）

初日の夜に講演をして下さった高橋彦芳前村長は、現在栄村で行われている自治事業を

「実践的住民自治」とおっしゃっていた。その意味は、住民主導によって「やりたいことをやる」ということである。確かに、道直しや田直しといった栄村の独自の自治事業は、住民が自分たちで話あうことや、自ら申請書を提出することから始まっている。

対照的に、高橋前村長は国の要綱にそって事業を行うと「やりたいことはできず」、「お金がかかる」とおっしゃっていた。

このことは、ある地域の開発政策を考える上では、何が必要であるのかを判断する住民の目を第一に考慮しなくては「地域（農村）に根ざした」政策には至らないということを表しているようで、開発を考える上でもとても重要な話であると感じた。

5：まとめ

栄村は山に囲まれた村であり、冬になれば豪雪が降る。この様に栄村と自然は非常に近い関係にある。今回見学させていただいた、村の自治事業の根本には、昔からその環境の中で暮らしてきた村人たちによる、自然の中で暮らしていくための経験や知恵の積み重ねがあるのではないかと思う。

今回の研修では、栄村の自治事業についてのお話を伺うことができ、またその現場を見学させていただくこともでき、非常に良い経験になった。しかし、はじめにも書いたように、1泊2日という短い時間の中では、栄村に関して理解したとは到底言えないだろう。最後に役場の方が「栄村は季節ごとに来ないとわからない」ということをおっしゃっていた。これだけ、自然の近い場所では、その季節ごとに生活の楽しみや苦しみは多様なものであるであろう。そして、その中から、村に暮らす人々の生活、文化、価値観が生まれてくるはずである。

私は、農村の人たちが持っている生活の知恵や、経験をもっと知りたいと感じた。それは、村にどのような政策があるのかということからだけではなく、農村住民の普段の生活の中からもっと感じてみたいということである。そして、もっと村の自然というものを肌で感じてみたいとも思った。

それを通して初めて「地域（農村）に根ざした」政策とは何かが理解できるのではないかと、今回の研修旅行から感じたからである。

背景：栄村は長野県の最北端に位置する。東西 19.1 キロメートル、南北 33.7 キロメートル、周囲 106 キロメートルにおよび、271.51 平方キロメートルの広大な面積を有しており、その 92.8%を山林原野が占める。

また、8 市町村と接しているため境界線は複雑なラインを描いており、北部を千曲川が東西に横断して流れ、これらの川の沿岸平坦部に集落を形成。南部は鳥甲山、苗場山を中心に 2000m 級の山々連なる山岳地帯で、日本海型の気候により、積雪量が日本一（7m85 c m）を記録したこともある日本有数の豪雪地である。

感想：今回栄村を見学についてはいくつかのポイントがあって、田直し事業、道直し事業、げたばきヘルパー、雪害対策事業などがあった。

田直し事業は農民主体の村直営事業で、事業費の負担は村と当該農家が各 50%となっている。水田で一番大変なことは水の確保問題で、水をきちんと分けるのは難しい。その解決の方法は、山村の棚田地域の地形に合わせて農家が使いやすいように区画整理することである。次は、田直しの経済問題で、農家負担について希望により、1 年据え置き 5 年償還の無利子資金を融資している。また、田直し事業終了後の補助については、集落毎に機械共同作業を奨励し、属人属地複合型機械共同作業と中型農業機械一式を助成し、現在 12 集落で実施中とのことである。

道直し事業に対しては、地域（沿線）住民主導型の村単独事業とし、早朝除雪のための集落内道路を優先、冬期における地区内道の交通確保が重要な課題となっている（高齢化が進み個人での道踏みが困難）。また、道路の形状や用地調達及び価額などは地域住民で協議して決めるものとし、協議の整った時点で、村に施工を申し出るものとする。申し出により村は、測量、用地買収、登記、協議設計を行い、冬期除雪オペレーター等の中から建設班を組織して施工する。

田直し事業や道直し事業は行政と住民が一緒に努力して、住民が行政の中に入って実践していく。行政機関がよく農家に話しを聞いて、全域で力を合わせて共通に協力することである。

「げたばきヘルパー」の名前は近所、隣なら下駄をはいて真夜中でもかけつけられる、ということから名つけられた。げたばきヘルパーによって、ワーキングチームをつくり、24 時間の介護を実現させるもので、住民パワーによる安心ネットとなっている。高齢者が

住みなれた郷土で希望抱き安心して暮らせる村づくりが目指されている。私は、平年でも2～3mの積雪がある地域の山中の集落でも、24時間、助け合うシステムがあるのに感動した。

雪害対策事業について、栄村は、日本でも有数の豪雪地で、昭和20年にはJR森宮野原駅構内で7m85cmの積雪を観測し、同JR駅に日本最高積雪記録として積雪標柱が建てられている。住民が自力で自宅から除雪路線までの道踏みが困難で、他からの支援が望めない世帯に対し、平成12年から村が道踏み支援員などを派遣し、無料で道踏みを支援している。

栄村にはその厳しい自然条件の下で、生きるのも精一杯であるがさらに、地域の繁栄を一所懸命いろいろな活動を協力して地域づくりの住民たちの姿を見るとすごく感心した。

高速道路を下りて一般道を進み、山の中の道を抜けるといつの間にか栄村に着いていた。すぐそばに千曲川が流れているからか、思い描いていたような「山村」よりは、ずっと明るい印象を持ったというのが、栄村の第一印象だった。もちろん、村役場周辺は栄村ではあるが、あくまでも栄村の一部分に過ぎない。役場でいただいた村内の地形図を見る限り栄村は思いのほか広い。村をずっと南に下っていった先には、今回は目で見ることではできなかったが、雄大な自然が広がっているのが等高線と水線から読み取れた。おそらく、栄村の山村性は今回見学できなかったこの部分に集約されているのだろう。それも、冬、雪の積もる時期に。

研修旅行の行程がしっかり組まれていたことと、事前の学習のおかげで見学した内容はスムーズに頭の中に入ってきた。今回の見学では「道直し」や「田直し」が中心になったと思うが、本で読んだ内容のものを現地で実際に見ながら説明を受けると、今まで輪郭のぼやけていた部分が先鋭になり、より理解を深めることができたと同時に、この制度がいかに住民主体であるかがよくわかった。小さな自治体だからこそ、住民が主体となった活動ができるのだとしみじみ感じた。私の調査地であるトカラ列島でも同じような強みを生かせないものだろうか。

山の中の棚田に関しては正直なところ、日本一傾斜のある集落のそれ（徳島県東祖谷山村）を見たことがあるので強い興味は抱かなかったが、その棚田から更に車で走った先にある野々海池から水を引いているのだということを考えると、先人の努力にただ感心するばかりであった。スキー場の上から村を見下ろし、途中にある水田を見て、水路も実際に歩き、最後に野々海池に至る、というのはわかりやすいルートだったので、単純に楽しめたとし、村の歴史を視覚的に見るようで理解しやすかった。

1日目の最後には、さまざまな政策の仕掛け人である高橋前村長の口から村政に関する話を聞くことができ充実した見学となった。

2日目は田直しと下駄履きヘルパーに関する見学が中心となり、田直しに関しては村人から信頼を得ているオペレーターの高橋健さんからの話も聞け、また、整備された広い田から、苗の数が数えられるのではないかと、というほどの小規模の田も見ることができ、村人の性格を垣間見られたような気がした。当部集落に行く前の平滝集落でも村人とのちょっとした交流があり、この日はより栄村に近づけたようであった。

下駄履きヘルパーに関しては実際のヘルパーからの体験談を聞くことができ、今までの見学と比べると少々堅苦しさはあったが、一番しっかりと話を聞くことができた。同じ村の人に介護を受けることに気兼ねする人もあるかもしれないが、村内の人にヘルパーの資格をとってもらい、文字通り下駄履きで行ける範囲での介護サービスをする、というのは実に効率的だと改めて感じた。まさに地域内互助精神の象徴であると思う。地域で互いに介助をしようという発想に関しては「大往生の島」（佐野眞一著）で紹介されている周防大島では村人同士が自然と行っているが、栄村の場合はこれを制度化した近代的なものだと感じた。しかし、介助を必要とする人が少なく、ヘルパーの仕事が少ない、という現実が良いことか悪いことか判断に迷う。もちろん、良いことなのではあるが。

全体として、松尾先生の案内のおかげで無駄なく見学をすることができたと思う。ただ、やはり村のほんの一部しか見られなかったこと、夏に行ったということ、この2点が一番残念に感じる部分であった。むろん、合計丸1日しか見学時間がないこと、現実的に冬に研修旅行を行うことが難しいことを考えるとしかたのないことではある。これ以上のことは、今回を機に興味を持った人が独自に行えばいいのだから。しかし、このように様々な団体が村に来て何かしているということを村の人皆が皆肯定的に受け入れるわけではない、ということ等を考慮すると、個人的には、大人数で短期間の視察を行うのはあまり好きではない。とはいえ、実践的住民自治に成功している栄村での研修旅行は大いに考えさせてくれる部分があったし、自分のもつ農山村に関する知識を養うのに素晴らしい機会となり、この研修旅行に参加してとても勉強になったと感じている。今後の勉学に活かすだけでなく、いずれ自分がどこかの自治体に参加する時期が来たときに栄村を通じて学んだことを活かしていきたいと思う。

最後になりましたが、今回の研修旅行に協力して下さった栄村の皆様と、先生方、室員の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。

栄村へ向かうバスの中、景色を楽しむ者、将来の夢を朝から熱く語る者、ひたすら眠る者。みなそれぞれに過ごす中、私は道を覚えることに必死だった。私は今年の6月に長野県下水内郡栄村を調査対象地に設定した。つまり今回の研修旅行だけでなく、今後も調査に訪れることになるだろう。そう思い、景色を楽しみながら、目印作りに集中した。予定より早く栄村役場に到着、役場職員の、宮川氏、斉藤文成氏、高橋真太郎氏、京都精華大学の松尾真教授から栄村の概要についてご説明いただいた。想像はしていたが、栄村は広い。たった一泊二日の研修でどこまで知ることができるのだろうか。そう思いながら、栄村を確認した。

一日目は森宮野原駅の日本最高積雪記念標柱を見ることから始まった。8メートルに近い高さだ。今でも2メートル近くの雪が積もり、半年近く雪が残る。そのような条件だからこそ、栄村では生活の中で「雪」が占める割合が非常に高いことがわかった。その後、貝立山にあるスキー場展望に行き、村を横断する千曲川。青倉集落や森集落、河岸段丘であり栄村とは近いながらもまったく異なる農業を営む新潟県の津南町が展望することができた。津南町と青倉集落西山田団地を同時に見ることができるこの場所からは、栄村がいかほど条件不利なのかを感じることができた。展望場後は野々海池へ。野々海池開拓が栄村で米の自給を可能にしたように、野々海池は村の生活になくしてはならないものであり、野々海池と村の生活を結ぶものが水路だと思った。水路は野々海池から降り、森、青倉、横倉、平滝、白鳥、そして飯山市の西大滝の6集落へ水を供給している。野々海池のある開田山脈は1000メートル近い山々が連なり、野々海自体が標高1071メートルのところであり、開拓工事が困難極まりないことが容易に想像できた。困難極まりない工事さえもせざる得ない状況が当時の村にはあったのだろう。現場主任であった前村長の父の殉職碑を見て、なんだか熱くなった。野々海高原を下り、天地、坪野、極野をまわった。特に極野では、今回の研修の目玉でもある「道直し」を行い除雪車の進入を可能にし、生活が改善された現場を見ることができ、事前勉強会で行ったことが活きた感覚がした。「道直し」というと「道」そのものの問題に聞こえるが、栄村の場合、道「だけ」が問題なのではない。その道が繋げる家が冬期に雪で閉じ込められてしまうこと。そこが一番の問題で、ここでも「雪」が深く関わっている。温泉と夕食の後、前村長である高橋彦芳氏に「栄村の実践的住民自治」についてお話を頂いた。「実践的住民自治」とは地域の協力性（協

働性)を活かし、住民の需要に合った支援をしていくというもので、「道直し」や「田直し」、「下駄履きヘルパー」などがあり、その村政には、古くから行われている「道普請」や「水路普請」といった村の営みが活かされている。「道普請」や「水路普請」は道や水路を持つ(使う)住民が自らの意思で行ってきた。栄村ではこの営みが今もなお残っていて、これが実践的住民自治の基になっているのではないかと思う。「実践的住民自治」の考えを開発途上国に活かすことができないだろうか。

二日目は平滝集落で「道作り」を、当部集落では「田直し」を、栄村社会福祉協議会では「下駄履きヘルパー」についてそれぞれ見学させていただいた。平滝集落は河岸段丘上に位置し、栄村の中では比較的好条件な土地を活かした水田が広がっていた。平滝も集落へ向かう道が狭く、冬期に除雪車が進入できなかった。一日目の極野と異なる点は、極野は道の拡張だったが、平滝は道の新設で、機械除雪のため、という道直しの性格がより端的に現れていた。道作りの工事は村の直営事業とし、役場の作業班が工事を担当する。また、降雪により地盤が沈下してしまうため、ある段階まで作り、冬を越し、修復してから舗装するという。見学中に集落の方に大きな夕顔(冬瓜よりも長く、苦味の少ない)を見せていただき、その大きさには驚いた。何より、自分の体と同じくらい大きいのではないかという大きさの夕顔を、必死に持ってくるお母さんの自慢げな笑顔がかわいらしかった。ありがたい。当部集落は山間に位置し、棚田が並んでいた。当部では「田直し」のオペレーターである高橋健氏にお話をさせていただいた。オペレーターとは住民の計画書を基に費用や期間の見積もりを出し、工事の際には重機の操作を担当する。高橋健氏も田を持っていて、工事の際には土壌の状態を崩さないように注意しているという。実際工事が済んだ田んぼには、水はけと水もちのバランスの良さを表すという「ヒビ」が入っていた。栄村社会福祉協議会では、ヘルパーの桑原氏にお話をして頂いた。「ヘルパーを始めて嫌な事などなかった。」という言葉が印象的だった。一般的に介護士というのは、なる人も多いがやめていく人も多い、きつい仕事と私は認識していたからだ。しかも下駄履きヘルパーの性格上ヘルパーさんは仕事と掛け持ちで介護を行っている。なのに、つらいどころかやっていたよかったという感想に驚いた。それは訪問することで、郷土料理を教わり、文化を学ぶことができるからで、それは介護士と要介護者という関係ではなく家族の延長のような関係だからだろう。「不満があるとしたら、ヘルパーの仕事が少ない」ともお聞きした。これは、一般的に高齢者と位置づけられる65歳以上の年齢の方が、栄村では高齢者と呼ぶに値しないほど元気な方が多いという意味が含まれていて、考えさせられた一言だった。

駅前の喫茶店「ふきのとう」でおいしいおそばを頂いて今回の研修は終わった。この研修や調査を進めていく中で、もしくはすべて終わった後に私は栄村に何を残せるだろう。わかるまで何度も来ようと思う。

最後に、研修中、村内を案内していただいた栄村役場職員の斉藤文成様、高橋真太郎様、美味しい夕飯を夕顔トークで盛り上げていただいた、吉楽の女将さん、「またたび茶」をサービスして頂いた酒屋のお母さん、夜分遅くまで、貴重なお話をして頂いた高橋彦芳様、平滝の夕顔お母さん、仕事を中断して「田直し」の説明をして頂いた、高橋健様、「下駄履きヘルパー」として生の声を聞かせて頂いた、桑原様、2日間すべてにおいてお力を頂いた京都精華大学の松尾真様、村内の案内から食事の下ごしらえまで、お世話になりっぱなしだった渡辺加奈子様、そして18名という大人数を優しく見守っていてくれた栄村の皆様がこの場を借りてお礼申し上げます。

今回は栄村が独自に行っている田直し・道直し、げたばきヘルパーという政策を中心に視察を行ってきた。話を伺った中で、一番印象的だった言葉が「実践的住民自治」という言葉だった。「補助金をもらうことならいくらでもできるが、それがどのように使われていくのかは明らかにはならないし、補助金をくれとばかり言っていたところでそのお金をどのように有効活用していくべきかということ論じる場所がなさ過ぎる。お金をもらうだけではなく、お金をくれと言うだけではなく、まずは自分たちが実際に動いていかなければならない。ほ場整備は国がやるべき仕事ではあったが、自分たちが使っていく畑や道は自分たちのやりたいように整備していきたい。しかし、国にまかせてしまうと自分のとおる道が細い道の場合はブルドーザーが入れずに着工はどんどん遅くなってしまいうし、規則が一律であるため、条件が合わないと整備がうまくいかず、補助金をもらわないのだとしたら、もらわないかわりに好き勝手にできる。また、栄村は全てが山であるため、登っての作業は大変困難を極めることになり、お金ばかりかかってしまうというデメリットもある。しかし、住民は自分たちが住む場所にある大切なものであれば、それを守りたい。そのためならなんだってする。自分の時間を費やして石を砕いて石を積んだ。」

この話を聞いた時、自分が今、調査に入っている群馬県片品村のことが頭に浮かんだ。そこは尾瀬ヶ原という広大な湿原が広がっており、高層湿原には多種の植物が生息し、世界遺産にも登録されている豊かな資源である。この資源を守っていくためにこの片品村の人たちはどれだけの時間を費やしてきただろうか。ダム計画が上がったときも、観光道路計画が上がったときも、住民の反対運動のおかげで自然保護の発祥の地とも言われるようになった。しかし、今はこの尾瀬ヶ原がある戸倉という地域の人たちはとても尾瀬ヶ原へ思い入れがあるが、それ以外の地域の人たちは私たちの尾瀬という意識はとても低いという。それどころかボランティアのほとんどが県外からの人たちであるのも事実だ。「自分たちがすむ場所にある大切なものであれば、それを守りたい。」という思いはあるけれども、住民の中でとても溝が出来てしまっているのが現状である。

そうした温度差を栄村では感じる事があまり無かった。教育委員会も村役場の人も住民一人一人を把握し、理解し、わかり合っている。そういった関係作りというのは本当に大切にかけがえのないものなんだと強く感じた。村の中で頑張っていこうという思い、村をなんとか持ち上げていこうという強い力、幸せそうな笑顔にとっても感動した。

また、もう一つ印象的だったのは観光業についてである。今考えているのは、4月の終わりから入って行く観光(ツアー)をやりたいとのことであった。十和田湖へ行き、雪の壁をバスで走る。このスリルを味わってもらいたい。また、ブナの森で癒されてもらいたいと言っていた。この頃は雪がもうしまってきているので、長靴で歩いていけるというメリットもあった。沢山のツアー客が入ってくることによって、今まで考えもしなかった影響が出てくる可能性はないかと尋ねたところ、荒らされては困るけど、そういった観光としてこの村を売ったことがないのでやってみたい。そうやって副収入を得て行かなくては行けなくなってきたと言っていた。

雪以外ではいくつか近くで観光(ツアー)を行っているケースもあるという。大型バスで来て、紅葉を見るために栄村に寄ったり、車で乗り付け、路上駐車したりということがここ数年多く見られるという。車が来てとめていること自体にお金は発生しないが、車を乗り付けることで交通渋滞が起き、地元住民に影響が及ぶ。また、通り道になっているためにトイレ休憩や景色を見るのに立ち寄るがお金は一切落としていかないという。入村税を取るべきだ！とかゲートをつくってしまうべきだ！という声もあがっているが、それもなかなか実行に移すのに時間もかかってしまう。だったらいっそ、栄村が観光を企画・実行・運営してしまえばいいのではということだったらしい。村の人たちはその資源の良さをわかっていないから、他人が入って何かしようとも何か採ろうとも何も言わないのだという。

その話を聞いた時にまた片品村を比較対象に考えていた。尾瀬ヶ原も入園料は取っていないし、中へ入る入口がいくつもあるので、入る人を制限することが大変難しい。車で乗り付けると大変混雑するので、駐車場は1日1000円。それも途中までしか行けず、ここからはバスで乗っていくしかない。混雑時はマイカー規制を行っている。また、片品村が全く把握していない量のツアーが企画・実行されている。1日に200~300人近く入る尾瀬ヶ原はその人的影響も少なくない。なので、栄村がツアーをやりたいという話を聞いたとき、少し寂しい気持ちになった。自然資源は当たり前自分たちのまわりにおいて、それは変わらず側にいて、当たり前森には行って……。そういった生活を住民が続けていけばおのずと魅力に気づき、近づきたい人が来て、遠のきたい人は遠のいて行くはずだ。それだけでは……ダメなのだろうか。

環境資源を売っていくことがいいか悪いかを判断することが大切なのではなくて、住民がそういったことにどこまで関わっているのかということが今回とても見てきたかったこ

とであった。住民の参加をとて強く意識しており、地域ごとにバラツキはあるにしても、田と雪が住民を強く結びつけていると強く痛感した。こうした人々のつながりと村独自の取り組みをずっと続けていって欲しいと思っている。

ここで見てきたことを自分のこれからの卒業論文、また群馬県での自分の取り組みに生かしていければとかがえている。

今回の長野県栄村への研修旅行は大変有意義なものとなりました。私は小さい頃から父親の趣味で長野県の中山間地域にキャンプなどで連れまわされていましたが、あくまで遊びの一環であり、今回のような勉強をしに行く旅行ではありませんでした。ネパールに渡航してからは一度も長野県を含め日本の中山間地域には訪れていなかったため、今回は栄村とネパールを対比させながら研修旅行を楽しむことができました。

将来、日本の中山間地域の農村開発の手法をネパールでうまく応用したいという夢があるので、栄村ではうまくネパールで利用できるようなものはないか注意深く観察していました。正直なところ二日間という短い時間では確信をもって「これは利用できる！」というものは見つかりませんでしたが、「ここをもっと深く見ることができたらいけるかもしれない…」というのはいくつかありました。ネパールと環境が近いブータンが栄村の道直し事業を参考にしているのもあってか、それは特に道直し事業に見受けられました。地方では公共事業の予算がほとんど下りないネパールではいかに少ない予算で事業を進めていくかというのが課題になっています。ネパールの山間部の道は細く未整備なものがほとんどのため、雨期の大雨や冬の豪雪によって道が浸食することが多く、私がネパールに滞在している時も毎週のように道路拡張の会議をしています。それは似たような環境、文化圏のブータンでも同様なことだと思います。設計書を必要としないという点に関しては、設計書を必要としないネパールの建築文化にうまく応用できそうな気もしました。現にブータンが栄村を参考にした理由にこのようなことが挙げられる気がします。栄村の道直し事業はヒマラヤの国の人々にとって魅力的なものなんだと、高橋前村長の講演や事業現場の見学を通じて感じました。研



修旅行後に少し気になった点として、住民同士で事業についての話し合いをするということでしたが、その「住民」とはどのような人が絡んでくるのかが気になりました。私が滞在していたネパールの村での道直し事業の話し合いは高カーストで教育水準が高い男性で大多数を占められて、その他の低カーストの人々や女性の意見は反映されていません。右の

写真はネパールの道直し事業の話し合いの風景です。

栄村を広範囲に見学して印象に残ったことは、ネパールのあまりにひどい遠隔地の村を見すぎているというせいもあるのか「想像よりも普通の村だった」ということです。

しかし、秋山郷を含めた栄村の一昔前の現状を記述した文献を読むと私が見てきたネパールと近いのです。なので、栄村は今のネパールのような状況から著しい発展を遂げて私の栄村の印象を「普通の村」とさせたのだなと思いました。同時に、発展に尽力された人々に対して感動しました。野々海池完成の経緯を聞いた時は特に感動しました。自分もネパールにおいてそのような人になりたいと思いました。

もう一つ印象に残ったこととして、山の尾根が太陽の光を遮って午後は暗い地域はどこか経済的に苦しそうな感じがしました。実際のところはよく分かりませんが、日照時間が農業に大きく影響して経済格差を生んできたのかなと思います。雪解けのスピードも遅いでしょうし、何かしらの負の経済効果はもたらしているのではないかと私は考えます。

最後に、栄村の棚田における水利権や灌漑、共同体の役割などについても、もっともっと質問したかったのが本音です。そして、栄村の発展の歴史についても深く知りたいと感じました。その歴史からネパールに活かせるヒントがあるような気がしてなりません。その裏づけは正直浅いものがあると思いますが、私の直感がそう訴えています。もう一度栄村、もしくは栄村に近い環境の村に行って将来への夢の実現に向けたヒントを見つけてこようと思いました。

01. はじめに

今回のレポートは、視察順に分けて感想と聞いたことをメモをもとにまとめる。

7/31

1. 栄村総合庁舎における歓迎式

栄村の概要について説明がなされた。メモをした限りでは、栄村の立地条件からみる特徴や村の総面積が長野県の約2%を占めていること、現在の人口が約2000人であること、過疎化の例として小中学生の数が50年前の約1500人から現在の約150人に減少したことなどが説明された。歓迎式の中で今回の研修のプログラムを作ってくださった京都精華大学の松尾教授から「村の施策を見る前にまず、村の姿（風景、村人の生活など）を見てから施策を見ないとなぜ施策が必要なのかが見えてこない」ということをお話になられた。

2. 森宮野原駅見学

森宮野原駅では、最高積雪地点を示したモニュメントや豪雪時の栄村の生活を記録した写真を見せていただき、「雪国栄村」の本当の姿を垣間見ることができた。写真の中には玄関先に雪が積もる前に降り始めた雪を徐々に踏み固めていく様子を撮影したものがああり、豪雪地の住民の方の知恵を見ることができた。

3. 青倉集落（野々海の貯水池へ向かうため軽トラックへ乗り継ぎ）

青倉集落を見渡して発見したものは、住宅一軒一軒に併設されていた池である。話によると、降雪時に雪かきをした際に雪を捨てる場所として使用しているとのことであった。なお、雪の降らない時期には食用または観賞用のコイを飼っているらしい。（実際にコイの姿を確認できた）

4. スキー場から栄村を展望

スキーシーズンにはゲレンデとなる山から栄村を展望した。ゲレンデからは長野県（栄村）と新潟県（津南町）の境を見ることができたのだが、目を見張るほど整った丘陵地（美しい台形）の上に広くきれいに区画された水田が広がっていた新潟県側に対し、山間にポツリと集落を形成し、棚田または笠ほどの大きさの水田が点在していた長野県側との景観の違いに驚いた。

ゲレンデでは雪崩防止用の柵や、水田を利用したコイの養殖池を見ることができた。雪国栄村ならではの知恵を再び垣間見ることができた。なお、コイの養殖なのだが栄村で養

殖されたコイも新潟県のブランドになってしまうらしい。ちなみに栄村のもっとも端にある秋山郷はゲレンデの真正面に見える二つの山を越えないとたどり着けないため、今回の視察コースからは残念ながら外れてしまった。

野々海貯水池視察

栄村は山間地であるがゆえに、棚田や田畑が点在している状況で農業生産の向上を図るために、水利用の効率を上げる必要があった。その流れから、野々海山頂付近に貯水池を作り配水のための水路を設ける工事が行われた。工事は雪の降る冬にはできないため、降雪のない時期に農作業の傍ら行われた。この貯水池工事において、かねてから栄村に根付いていた「共同精神」が農作業で忙しいさなかでありながらも住民一体となって工事をいうエネルギーになったと考えられる。

6. 極野の道直し現場視察

極野の道直しの現場を見て気づいたことは、住民の方の要望をただただ受け入れるわけではなく、村が予算の上限をしっかりと設定し、工事を行うオペレーターも交えた3者間でのしっかりとした打ち合わせのもとで工事に至るということである。道に関しては一部の住民の問題ではないため、近辺（集落といえる）の住民同士で納得するまで話し合ったうえで、村に届出を行うといった過程を経ることが必須のようである。なぜこのようなことを行うのか、その理由については夕食後の高橋彦慶前栄村村長のお話で語られた。

また極野地区の現場では村で行われる祭祀や新聞配達の仕事、家のつくりに関してもお話をいただいた。まず村で行われる祭祀であるが具体的な内容はメモを取っていなかったため記載できないが、高齢化により行われなくなってしまった祭りがあると聞いた。新聞配達については、村内の各集落に配達を請け負う住民の方がいらっしゃるそうである。ただし配達を請け負う住民の方がいらっしゃらない集落に関しては、業者が郵送するのだが朝刊が送られてくるのは夕方になるらしい。最後に家のつくりであるが、栄村に古くから建てられている民家の壁は格子状になっている。理由は豪雪時によって家の壁も雪に囲まれることが多く、壁の資材が損傷しやすくなるので、簡単に壁の張替えができるように格子状の壁ができた聞いた。これは個人的な見解であるが、格子状の作ることで屋根に雪が積もった際の負荷を分散させる狙いもあるのではないかと考えている。

7. 北野地区の田直し現場視察

道直しと同様に住民の方の意見をもとに村とオペレーターの三者立会いの下で施工される。住民の希望と予算が合えば、田んぼ一枚を根こそぎ掘り返して土を入れ替えることも

ある。

8. 北野温泉

俗に「学問の湯」と呼ばれる。温泉の効果かはわからないが最近、統計を読むことが苦ではなくなってきた。なお栄村村内には北野温泉のほかに2つの温泉があると聞いた。しかし、話を聞いた際にメモを取らなかったため、所在を覚えていない。

02. 夕食

森宮野原駅前の通りにある旅館で夕食をいただいた。栄村産の野菜などヘルシーな食材が中心の料理が並んでいたため非常に食べやすかった。またヘルシー食材に囲まれた中で異彩を放っていた「鯨の目玉汁」は高カロリー、高タンパクの料理で脂肪分（エネルギー）が不足しがちだった昔の栄村ではとても重宝されていたと聞いた。

03. 寄宿舎

今回の研修旅行の宿泊先としてお世話になった寄宿舎は、かつて栄村立栄中学校の学生寮として使われていた建物であった。栄村は南北に広くしかも山道であるため、自宅からの通学が困難な生徒のために寮がつくられていた。時代を経るにつれて生徒数の減少の影響もあってか寮としての役目を終えたのである。

9. 高橋彦慶前栄村村長のお話

高橋前村長は「道直し」、「田直し」、「下駄履きヘルパー」といった施策のように栄村独自の「住民自治」を作り上げたといっているいい方である。夕食後寄宿舎に戻ってからお話をいただいた。

高橋前村長は、野々海貯水池工事の際に先頭に立って住民を率いるなどされていたお父さんの背中を見て「住民の共同精神」を学んだとおっしゃっていた。学生時代には仲間とともに日本の今後のあり方を夜な夜な語り合ったそうである。前述の野々海貯水池工事の際にお父さんを亡くされてから、村に戻った後村長となられたときに、「住民自治」を目指した村政を行われた。きっかけとしては国の補助事業により発生する負担を村でまかなえないこと、そもそも補助事業を得られる可能性が低かった栄村においては住民主体の事業が適していると判断されたからである。「道直し」、「田直し」の要請に際して納得するまで住民どうし話し合ってから村に要望してもらうというスタンスを取ったのも「住民自治」を根付かせるためのものだと知った。

村の現状をよく理解された上で発揮された手腕は、派手さこそないが政治は住民のためのものであることを前提にして行わなければならないことを教えてくださったと思う。国

も栄村に着目すべきであろうと感じた。

8 / 1

10. 平滝地区の道直し現場視察

前日、高橋前村長が道直しの必要性などをお話になった際の話題の一つであった「国の補助事業」との違いを再確認できた。国の補助では最低道幅などの基準が設けられているうえに、住民にも多くの負担がかかってしまうため、国の補助の導入は厳しかった。

この日は最近施工が終わった「道直し」の現場を視察させていただいた。前日は施工中の現場を視察させていただいたこともあり、工事の過程がよくわかった。特に資材に地元産の石や材木を使用するといった工夫はいろいろな場面で参考になると感じた。バスの中で聞いたお話の中に、「住民協議では絶対に多数決をしない。少数派ができては施工してもトラブルになる。だから納得するまで話し合ってもらおう。」という内容のお話があったが参考にしても実践となると気が遠くなりそうだと感じた。しかし、「徹底」することが成功への道であることを示しているのかも知れないと今は考えている。

11. 当部地区の田直し現場視察

この現場では「田直し」で活躍されているオペレーターの高橋健さんの案内と説明を中心とした視察であった。特に注目したのが「水利権」のお話である。特に条例として定めているわけではないが、生活と農作業にとって命の素となる水の分配に関しては古くから争いがあったと聞いた。顕著な例としては栄村に入ってきたばかりの人間の畑にはなかなか水が回ってこないなどいろいろあるそうだ。

当部地区の水田の特徴としては広くきれいに区画された水田と小規模の棚田が混在していたことが挙げられる。もちろん農家ごとに持っている水田は違うため「田直し」は難しいとおっしゃっていた。

12. 高齢者福祉センター視察

主に「下駄履きヘルパー」の説明がなされた。そして現役ヘルパーの桑原さんが体験談を語ってくださった。体験談で話されていたが、「栄村の高齢者の方々は元気だと思う。強がりもあるのかも知れないですが…」という言葉に考えさせられた。

「作業に困っている人がいたら助太刀する、集落全体で高齢者のことを気にかけるなどの共同の精神が薄れてきているが、まだ残っている。」と桑原さんがおっしゃったときに実際家や農機具は近代化しておりそのため自分で生活しやすくなった分、近所付き合いの機会が減ってきているのかと感じた。

13. 森宮野原駅で昼食・DVD鑑賞

DVD自体は20年ほど前のものであったが、当時の生活の様子、祭祀などの行事の様子が栄村の四季の移り変わりに沿って紹介されていた。

03. 最後に

今回の研修では歴史、施策の背景を中心に栄村の姿を大まかに捉えることができた。ただ、真夏に行われたため、栄村の本来の厳しさを実感できなかったのが残念である。できるならば冬の時期にお邪魔して生活の違いを実感できればと思っている。

最後に今回の研修プログラムを作ってくださった松尾教授、そして、お邪魔させていただいた栄村に感謝の気持ちを表すとともにレポートの終わりとしていたい。

栄村を訪問することを聞いた時、正直、日本の中山間地域の実情に触れるだけ、少なくとも4年である私は、おまけのようなに付いて来ただけ……。そう、思っていた。

そんな思いが変化したのは、訪問初日の夜に栄村の前村長である高橋彦芳さんのお話を聞いてからだった。

「実践的住民自治」同じような言葉はよく耳にする。けれど、高橋前村長の言葉にはそれを住民みんなで実行してきたという強い自負が感じられた。

すべては住民が理解し、納得してできるもの。理解できない、わかってももらえない人たちにどう説明したらわかってもらえるのか。そんなことをずっと考え、語りかけてきたのだろうと思った。

私の父も生まれ故郷である町の町政に関わっていたこともあり、地方の行政の難しさは少なからず理解しているつもりだった。どんなに有能な首長であっても住民ひとりひとりが変わらなければ、自治体は変わることができない。地方独特の風習や習慣、人間関係やしきたり、ましてや、仕事をして生きてゆくための「利権」や「しがらみ」がある中で、どのようにして住民の人たちが理解し、また、先導する役目の行政役がわかりやすく説明するかが問われていると思う。難しいことではなく、住民の立場に立った視点で、根気よく説明していくこと。そして、住民自身が声を上げていくことこそ大切なのだ。

また、これは日本のみならず、私が長く関わり続けているカンボジアの農村開発にも繋がっていると思った。

「どうして、理解してもらえないのか？」「どうして、伝わらないのか？」そんな思いに打ちのめされることがある。けれど、根気よく、真摯に人と向き合っていくことの大切さ、住民の視点で考えることの大切さを改めて考えさせられた。

また機会があれば、栄村を訪れたいと思うし、高橋前村長にぜひもう一度、お会いしたいと思う。

今回、私は日本の村で自立を目標に取り組みを行っている栄村で、田直し、道直し、下駄履きヘルパーなどの取り組みを現地で直に話しを聞きながら見る事が出来て本当に良かったと思います。そして、このような取り組みを引き起こす栄村の人々が持ち合わせている自立の精神の源とも言うべき野々海池を訪れることが出来たことも本当に良かったです。

豪雪地帯である栄村で、1000 ㍓を越す山の上にため池を作ることがどんなに大変なことであるかということは作った村の人たちでないと分からないと思います。しかし、作る前は誰もが実現可能かどうか分からなかったと思います。しかし、村の人たちが生きていくために、自分たちが食べる分のお米を自分たちで自給しようとした姿勢にとても感動しました。自給率が40%である日本において、こうした栄村の人たちの自立の精神を日本人は大いに学んでいかなければいけないと思います。

今回、栄村を訪れたことは本当に良かったです。日本は世界から新しい技術を学ぶよりも、日本国内の村から学ぶべきことのほうが大切なことがたくさんあるのではないかと、訪れて思いました。貴重なお話や体験をさせていただきありがとうございました。

栄村の研修旅行を通して、栄村は昔の人の知恵がつまった村という印象を受けました。初めに道中で見かけた家の造りが、変わっていることに気付きました。屋根は雪が落ちるような急な斜面にしてあり、雪の重みに耐えるために屋根と家に隙間があって柱で支えられていたりしました。一回はほとんどの家が車庫になっていて、外にはどの家にもはしごが立てかけられていました。雪の多い私の地元でも似た屋根の形はしていますが、形だけで耐えられる雪の量です。家の作りの工夫から、雪の多さが半端ではないことがわかりました。

道直しは、作業に取り掛かるまでの大事な工程とその大変さに驚きました。拡幅だけでなく、新たに道を作るということは、田畑などが削られるということもあり、大きな決断になる。農民にとっては、土地が何より大切に、何よりの財産である。それを失ってでも作りたい道というものの価値を考えさせられた。私の町にも当たり前に道があって当たり前に除雪機が通っていましたが、雪道の中で畑に続く道がないことは恐ろしいと思いました。除雪された道があって、そこを歩いて畑に行き、雪に埋まった野菜を採っていました。雪の多さでそんなことは出来ないかもしれないけれど、きっと道があることは安心なのかなと思いました。それと、道直しは2年かけて行われているということにも驚きました。雪の重みで沈下するのを防ぐため、1年目の雪の重みで土を沈下させ固めてから舗装するそうです。

田直しでは、「オペレータは、農業のプロが良い」という言葉が強く印象に残りました。土木系を専門とする道直しとは異なり、設計図なしで行う田直しは田を知る、農業の専門家が良いということでした。土木関係や機械に詳しい人がやっていると思っていたので驚きと同時に、感心しました。こういったことから住民と行政の距離が近づくのだと思います。

私は今回の研修旅行で、もっと住民側に近い昔からの知恵を知りたいと思いました。水田のせき止めに石を使っていたり、夕顔で干瓢を作っていたりということも見る事が出来たからです。同じ冬の保存食でも地元とは異なる部分が多く感じられました。また、行政事業についても、今度訪れるときには住民からの声を聞けたらと思いました。個人的なことですが、ブータンに機械指導で支援している団体についてお話を聞くことが出来たのも、とても嬉しかったです。ブータンの道は舗装が十分でなく、山岳地帯特有の曲がりくねった道が多くあります。団体にもお話を聞いたりして、栄村の事業の特徴から途上国へつなげるヒントを見つけられたらと思います。

今回栄村研修に行って多くのことを学んだ。実家にも田はあるが、今まで田に対し興味を持つことはなかった。田直しの現場では実際に田直しをしている方の話を聞くことができ、どのように田直しが行われているのかなども知ることができた。田直しは田直しをする人と農家の信頼関係で成り立つ事業なのだと感じた。高橋さんでなくては任せたくない、高橋さんなら大丈夫など農家の方から出ていることがとても大きなことだと思う。

次に、昔作られた道を通った時本当にこんなところまで石を運び道を作ったのだろうかと思った。距離もあったし、何よりも高低差があったことだ。昔は機械など無いので、自分たちの力だけで運んでいた。それは今では考えられないくらい大変なことで、昔の人たちにとっていかにその道が必要だったかが感じられた。ダム建設など本当にすごいと思う。また、森宮野原駅で見た栄村の積雪の高さにも驚いた。昔は家が覆われるくらい降っていたそうで、どの家にも屋根には梯子が掛けられていた。雪が多く道が狭いので、除雪車が通れないため村では道直しをして除雪車が通れるように作り直しているところがあった。除雪車が通れるか通れないかは生活に支障が出るので、栄村では重要なことである。除雪は午前3:00～7:00に行われ、朝の通学や通勤までには終えるようにしていると言っていた。道直しは、除雪のために本当に必要であるということ現場を見て感じた。それは、冬場を想像すると生活や移動が大変だろうと思ったからだ。昔は除雪がなく、行動範囲が限られたところで生活していただろうと考えられるのでどのように生活をしていたのか疑問に思った。道ができる前は、隣の家との道がなかったが生活していたのである。栄村独特の文化があるのだろうと考えられる。

栄村は山間地域であるため、山から見る景色はとても素晴らしく、県境を見たのは初めてだったので感動した。また、早朝に山から見る景色と昼に見た景色は違って見えどちらも素晴らしかった。冬場は雪に覆われるためスキー場になるとのことだったが、それは村営で運営されているとのことであった。観光の分野に関しては、あまり力を入れていないようだったが、とても多くの魅力を持ったところだと感じたのでアピールをするべきだと思う。

高橋前村長の話を聞き、行政に住民が入るのではなく、住民に行政が入るという考え方に感心した。村民と行政が近づくことは村の発展には必要なことであり、村民が少ないからこそ役所の方が村のことをよく知り、分かるので村民の意見を取り入れることができる

のだろうと思った。

今回栄村を訪れて、まだまだ知らないこと、興味あるものがたくさんあった。1つめはそこに住む人々の生活についてである。どのように冬の生活をしていたのか、食物のことであり、コミュニケーションの範囲などである。今ではなくなってしまったものもあると思う。そこを知ることで、もっと違った見方で栄村を見ることができるのではないかと考える。2つ目は、お祭りについてである。栄村を回っているときに、神社が何箇所かあった。そして、集落でお祭りをすると言っていた。どんなお祭りなのか、何を祭っているのか知りたいと思った。お祭りは、引き継がれる文化だと考えるので昔のことを知れるのではないかと思った。

栄村研修は、異文化とのふれあいであり、村というものを感じることができた研修だったと感じている。栄村でお世話になった方を含め、先生方、先輩方、に感謝いたします。ありがとうございました。

今回、栄村に行き感じたことは、本当に地域が村民で動いているなど感じたことです。

鹿児島育ちのため、豪雪地帯という地域へ行ったのは初めてで、建物の形など見るものの多くが興味深かった。その中でも、村民が他人や役人・役所任せにしないで自分の土地や集落をより良くするべく自分たちの力で改善している点が、自分が今まで出会った地域の人々と違うと思った点である。自分やご近所さんで使う道や田んぼを改善するという、決して大きな事業とは言わないが、生活に密着した改善という点ではとても大きい改善だと思います。特に道直しについては、その道路を使う住民やその道沿いの住民など、多くの人々に計画の是非を確認し、いくつもの会議を通してから行っている事が説明を聞いて改めて住民自治というものに沿っていると感じた。その中で役所は、少し知恵を貸し、手助けをするという最小限の関わりをもってサポートしていってお互いに干渉しすぎないところも成功につながったのではないかと思った。また、地域の農業を知っている土木関係者に依頼しているという点も成功の大きなポイントではないかと思った。下駄履きヘルパーは、現在需要と供給のバランスがとれていないらしいが、女性がこれだけ団結して動いているシステムという点を利用して、まだ村の中では若い世代に入る人々なので若い力を流用できないのかと思った。

栄村には鉄道も走っているので、そこをもう少し意識した村おこしも面白くなるんじゃないかと思った。

また、今回の研修中に知ったことだが、自転車のレースを開催していることがわかった。栄村を周った時に山道で坂が多いと感じたので、このような地の利を生かした地域の催しは自分がこれから目指していきたい事ともつながっていたので、ものすごく興味がわいた。また、農業用水の水路図の話も興味がわいた。よく考えれば確かに日本の農村の水路というものはすべての圃場へ水がいきわたるように無駄なく高地から低地へ農村をはしっている。この技術を海外の水が少ない地域に応用することができたら、少しは役に立ちそうな気がした。自分自身、区画整備をまだ行っていない地域の日本の農業用水路について少し深く調べたくなった。

今回の研修旅行として長野県栄村を訪問させていただいた。

栄村は長野県の北部に位置する自然豊かな(野生のホタルなどもいた)中山間地域である。

総面積は 217.51 k m²、人口は約 2400 人が暮らす少子高齢化や村外への人口流出といった現象が問題となっており、村の約 92.8%が山林原野である。

この栄村研修を通して非常に多くのことが勉強になった。特に興味深かったこととして住民を主体とした政策が挙げられる。

田直しや道直しといった村内の土地の整備においては地元住民の希望や意見に基づいて工事を行うなど、地域とのつながりの重要性や、住民自らが地域開発に取り組むことでより一層暮らしやすい村づくりができることを、あらためて感じた。

また、実際に田直しを行った現場を見ることもでき、非常によい経験となった。

夜の栄村前村長、高橋氏の講演では栄村の歴史についてや、栄村独自の住民自治政策の事、道直しが実際に海外で活かされていることなど、興味深いお話を聞かせていただいた。

下駄履きヘルパーやデマンドバスなどの高齢化社会への対応についても興味深かった。特に下駄履きヘルパーだけでなく地域住民同士の交流をより強くするはたらきもあることを知りその重要さを痛感した。

2 日目の昼食後に見たビデオには栄村の概要や一年を通した栄村の様子などが映っており、とても興味深かった。特に冬の雪害は普段私たちが経験しているものと全く違い、その恐ろしさに驚いた。

また野々海池の歴史や見学、道中に見た栄村の地理、水田の様子なども実際に自分の目で見る事ができ非常に良い経験となった。

今まで国内の農村政策に接する事は少なかったが、今回の研修を通して接する事ができてよかったと思う。今後もこのようなテーマについても積極的に関わりたいと思う。

また夕食の際お世話になった民宿の方々、北野天満温泉や研修中に貴重なお話を聞かせていただいた地元栄村の方々、研修期間中に説明して下さった高橋氏や村役場の方々からは、ほかでは味わった事のない温かさを感じた。

その他、この研修を通す事で、それまで知らなかった農業政策が学べただけでなく、栄村の方から、地元を大切に思うことの大切さをあらためて学べた事も大変興味深かったと

思う。

7月31日～8月1日にかけて長野県栄村に研修旅行にいきました。そこで、“実践的住民自治”の名の下において行われている、田直し、みち直し、下駄履きヘルパーなど、様々な栄村独自の政策について学ぶことができました。

栄村の棚田に関しては、当初棚田100景にでてくるような田んぼを想像していたのですが、実際は想像よりもかなり大きい面積のものでした。しかし、丘陵地帯に多くの田があり、そこにいくまでの道が狭かったので、重機の搬入等が凄く大変なんだろうなと思いました。そんな悪条件にも関わらず、「先人から伝えられてきたものだから」と、損得勘定ではない気持ちで棚田を守り続ける栄村の人々の気持ちから、今の日本では忘れ去られている何か大切なものを感じました。

田直しの現場を見に行ったときは、複数の田を一つにまとめるという工事ではなく、田の排水性の改善をする為の工事をしている所でした。この工事は田の所有者からそのような要望があった為に行っているということで、それが画一的なものでは無く、本当に住民のニーズに応じた事業をしているのだと実感しました。

田直しの事業申請書も、住民が気軽に田直しの申請をできるようなごく簡単なもので、住民によく配慮されているものだと思います。

みち直しの現場を見に行ったときに一番印象に残ったのは、役場の職員が比較的作業の少ない春・秋の空いた時間を利用して作業を行っているという点です。役場職員が事務作業と工事作業を兼任してやるのは非常に効率的で無駄のないものだと思います。ただ、質的なものとして、専門の業者ではなく、役場職員がやっても大丈夫なものなのかと思いました。

下駄履きヘルパーのお話をセンターで聞いた時は正直驚きました。と言いますのも、当初本で読んだ時は下駄履きヘルパーは、田直し、みち直しに並ぶ地域に根付いた画期的な事業だと思っていました。しかし、栄村は高齢化率が高くとも、住民が皆健康なため、ヘルパーの需要が無く、ヘルパーが機能していないという実情を保健センターの方や下駄履きヘルパーの方のお話を通して知ったからです。確かに栄村は、お年寄りの方が多くいるにも関わらず、皆さんが本当に元気に農作業をしている事が凄く印象的でした。

資料調査で本を読んだ時は、「栄村は限界集落でお年寄りが多いから、下駄履きヘルパーが凄く活躍しているだろう。」と、安易に考えてしまったのですが、実際に現地にいっ

て見てみるとそうでもないのだと思いました。私は今までこのような資料調査と現地調査を同時に行った事が無かったのですが、今回のような経験から、資料調査と現地調査はどちらか一方がかけても駄目で、それらを同質のものとして扱うことの重要性を学ぶことが出来ました。

道の駅に行った時に一番印象に残ったのは農産物の安さです。地元特産品の、夕顔や糸瓜が凄く安い値段で売られていたのにはびっくりしました。確かに、地場産のものは流通コストがかからず、通常の農産物よりも安く販売できるかもしれませんが、栄村にしかないものとして、何かしらの方法でブランド化して、通常よりも高い価格で売った方が良いのではないかと思います。道の駅等の地場商品を売っているようなところとの差異はなく、また、生産者から消費者に対する発信力が足りていないというような事を感じました。

今回の私個人の一番知りたかったことは、若者が住みたくなるような魅力ある地域なのかということです。やはりどんなに画期的な事業をやろうとも、その地域が魅力的で若者が住みたくなるようなものが無いと、いつかはその地域は無くなってしまいます。こういったことから、この栄村が“若者に魅力ある地域かどうか”が最大の問題だと私は考えています。この点に関して、栄村がはたしてそのような地域であるか否か、今回の調査だけではわかりませんでした。ただ、栄村の最大の雇用の場は役場であるといったお話しから、あまり雇用の場が無く、それに代わる雇用の場の創出が必要だと思いました。

今回の栄村研修で感じたことは、住民が積極的に地方自治に関与し、行政がその声に応えることの重要性です。本来政治とは、住民が積極的に自らの要望を行政に伝え、行政がその要望に応え、住民により良い生活環境を提供するものでなければならぬと私は考えます。しかし、実際に行われているのは、住民の生活の実態を省みない非現実的なものばかりであり、その住民自体も政治に関心を示していないという状況が、今日の日本国の中で往々にして見られると思います。そんな中、住民が積極的に自分たちの要望を伝え、それに行政が応えるという栄村の実践的住民自治は、本来の行政と住民とのあり方であり、まさにこの国のあるべき姿を示しているということを感じました。

また、栄村最大の特徴である“雪”について今回の研修では身をもって体験することができませんでした。やはりどんなに資料調査をしても現地にいってみたいとわからないことがあると思うので、次は是非冬に訪れてみたいと思いました。

今回、初めての研修旅行ということで、栄村に行ってきましたが、さまざまな貴重な体験をさせていただいたなど改めて思います。私は今まで田んぼというと平地に広がっているものしか見たことがありませんでしたが、栄村での田んぼというと、きちんとした場所にある田んぼの方が少ないだろうというくらい想像を超えるありえない場所に田んぼがあり、とても驚きました。

それと同時に、厳しい環境の中でも必死に暮らしを豊かにしていこうという栄村の人々の生きる力の強さを感じることができました。

また、一日目の夜に話をしてくださった、高橋前村長の実践的住民自治の精神が村全体にしっかりと根付いているなど思いました。それは、役場の方々の生き生きとした親切な対応や、村に住んでいる人々の暮らしの様子、田直し名人や下駄履きヘルパーの方々などの話から伝わってきました。

栄村の人々をみていると、自分のことだけでなく、他人のこともきちんと考えることがどれだけ大切なことなのかということが分かりました。この経験を自分のこれからにつなげていこうと思います。